

小論文“De ente et essentia”成立 に関する文献学的考察

岩 本 一 夫

一

小論文“De ente et essentia”はトマス・アキィナスの数多い著作のなかで、最初期のものであるが、哲学的或いは存在論的側面からも最も重要なものの一つと目されているものである。例えば、グラープマンはその重要性に関して次の如く傍証している。

Wer die das philosophische und theologische System des Aquinaten durchherrschenden Grundgedanken und Grundgesetze in ihrem Zusammenhang verstehen will, muß eben in seine Seinslehre sich versenken. Wir begreifen jetzt auch, daß gerade das Büchlein “De ente et essentia,” dieser Grundriß der thomistischen Seinsmetaphysik für das Verständnis seiner Gesamtichtung und Gesamtanschauung von Belang und Wert ist.¹⁾

グラープマンのこの言葉は、当小論文の構成・用語・内容等に鑑み、公約数的評価と見做してもよいと思われる。

しかしながら、この小論文の性格を考える上でここに一つの問題

が生じる。即ち護教博士であったトマスの立場からすれば、この小論文の有する存在論的側面を単にその理論的整合性の観点から論じて尽くしうるか、という問題である。この問題は、十二世紀・十三世紀のスコラ哲学自体が内部的に持っていた「学としての神学」、或いは「神学と哲学」の問題とも抵触する訳であるが、ここではそれと決して無関係ではないが、トマスの方法論上の問題として若干視点と問題意識を異にするものである。

一般にトミズムがアリストテレスの論理・概念の受容援用による一つの体系と評されているのは周知の事実である。

元来キリスト教神学は、原始キリスト教以来種々の神学論争に際して何らかの形でギリシア哲学の受容・移植を必要としたのであり、トミズムにおいて一つのカトリック的融合・総合が成し遂げられたと評されている。しかしながら、所謂超自然的啓示の真理に基づくキリスト教が、自然的理性に依拠すると言われるギリシア哲学とは依って立つ原理を異にしていると考えられるとすれば、その受容・移植には或る一定の限度・或いは、ある種の変容が加えられているのではないかと思われる。

そこで、トマスの存在論的根柢構造が提示されているというこの小論文を、かかる問題意識から、その成立事情と目的をめぐって考えてみたい。

二

この小論文の真偽に関する問題は現在のところ全くない。トマ

スの著書目録、その重要性故に古来刊行された多くの注釈書・批判版等によって、これがトマス自身の手に成るものであることは広く認められている。それに伴って若干の重要と思われる箇所を除き、原文批判もほぼ確定している。しかしながら、この小論文の性格を考える上で重要と思われるものの一つが、この小論文の表題に関するものである。著書目録や注釈書によっていくつかの異なる表題があるのである。

まず著書目録に記載されている表題に関しては、それを直接照合することはできないので、当面主としてマンドネ P. Mandonnet, "De écrits authentiques de S. Thomas d'Aquin" に依る外ない。

彼に依れば、トマスの著書目録は大きく三つのグループに分けられるとして次の三つを掲げている。即ち、公式目録・プトレマエウス・ルケンシスとベルナルドゥス・ギドニスに依る目録、説教者教団の著者名簿 *Tabula scriptorum Ordinis Praedicatorum* の目録、この三つであり、他は、その各々から派生したものである。

第一の公式目録とは、トマスが聖列に加えられたのは一三三三年であるが、その式に到る過程で加えられたものを指し、パリ国立図書館のラテン部門の写本三一一二と三一一三に完全な形でその経過が記録されているという。それは、十四世紀の紙に記されたものであるそうだから、この目録の成立年代に関しては問題がないであろう。この目録は、写本三一一二の五八にあって、七

十の著書が通し番号を打たれて、三つのグループに区分されている。その最初の部分に二十五の著書が納められ、この小論文はその十七番目に "De ente et essentia, ad fratres socios" と記載されている。そして、二十五番目の次に第一グループをしめくくって、「上にあげた全てのものは、オプスクラと呼ばれている。」 *Supradicta omnia vocatur opuscula* と付記されている。マンドネは、当時 *opus* の指小辞で呼ばれていたこれら小論文群が、一定の規準に従って配列されていない等の理由から、他に何かまとまった形で一卷を成していたのではないかと推定している。この目録の原型は、トマスの忠実な随行者レイナルドゥス・ド・ピペルノ *Raynaldus de Piperno* に帰せられており、その真偽については全幅の信頼が寄せられている。

第二グループを成すプトレマエウスとベルナルドゥスのうち、まずプトレマエウスの目録は、この小論文の成立年代についても貴重な証言を提示している。

トマスのナポリ滞在中 (1272~1274) の彼の聴講生でもあり、聴罪司祭でもあったプトレマエウス・ルケンシス *Ptolemaeus Lucensis* は、その著書『教会史』 *Historia Ecclesiastica* の中に、トマスの伝記を最初に残した人でもある。この書の製作年代を正確に決めることはできないが、その最初の版が一二九四年に出で、遅くとも一三一七年には完成されたから、そこに付記されている著書目録は最も古いものと見做されている。

その特徴は大きく二つの部分に分けられ、第一の部分では、ト

マスの生涯の一定の時期に推定された順序で各著作が記録されており、もう一つの部分では、三章に亘ってオプスクラのリストが記されているが、その順序にも一定の規準が見出せない。

問題なのは、この二つの部で、当小論文の表題が異なっていて記載がなれていることである。

第一の部分での記載は次の如くである。

LIBER XXII, cap. XXI. Annorum XXV erat (frater Thomas) cum primum venit Parisios, ubi infra XXX annum Sententias legit, et conventum in thologia, sive licentiam recepit. Infra autem magisterium quatuor libros fecit super Sententias, videlicet primum, secundum, tertium et quartum. Quosdam etiam libellos composuit. Unus fuit contra Guillelmum de Sancto Amore, qui incipit: Domine, ecce inimici tui sonnerunt. Secundum fuit *De Quidditate et esse*. Tertius fuit *De principis naturae*.

小作品中の二番目の“De quidditate et esse”は、その成立年代を示唆する *infra magisterium* や、その他の事実から、公式目録十七の“De ente et essentia, ad fratres socios”に外ならないはずだが、何故に表題が異なるのであろうか。更に奇異なことは、この目録の第二の部分、二十三卷十二章では次の如く公式目録と同じ表題になっているのである。

Tractatus *De ente et essentia*, quem scripsit ad fratres et socios, nondum existens magister, qui sic incipit: Quia

parvus error in principio...

この相違については、マンドネは何もふれていない。

更に、この第二グループに属するベルナルドゥス・キドニス Bernardus Guidonis は、現時点では一三二〇年以前のものとは考えられないトマスの伝記中の目録で、Tractatus *De quidditate entium*, seu *De ente et essentia*, ad fratres et socios, qui incipit: Quoniam parvus error in principio... と記しているのである。

マンドネは、ベルナルドゥスがプトレマエウスの目録と公式目録の両方を手許に持っていて自らの目録を作成したことは疑い得ないとしている。

とすれば、プトレマエウスも公式目録のことを何らかの形で知り、後の方をそれに依った可能性が全くないという訳ではないように思われる。仮りに、そうであったにせよ、では最初の *De quidditate et esse* は何を元にして出て来たものであろうか。それに、ベルナルドゥスは、マンドネの言う如くプトレマエウスの目録を知っていたとすれば、何故に *De quidditate entium* としたのであろうか。当然、この三つの目録がそれぞれ異なる写本に基づくものであると考えざるを得ないのである。

トマスの著書目録に現われる表題は、この三種類のどれかである。

第三のグループの目録は、サン・ジャックの修道院で一般信徒の閲覧に供していたと言われている「説教者教団の著者名簿」に

含まれているものを中心とするもので、トマス¹⁾の項の四番目に *De ente et essentia* とあるのみである。その成立をマンドネは、デニブル P. Denifle の研究を継承しつつ、一三二一年以前に推定し、それ故、古来の点ではプトレマエウスの目録に匹敵するが、その価値は、いくつかの点で余りないと言っている。というのは、多くの真作が漏れている上、それ以上に多くの偽作が含まれているからである。その理由として、トマスの著作が相当な数にのぼるのでパリでよく知られているものは省かれたのではないかということ、パリには偽作が増えるに好都合な土壌があったという二つがあげられている。

この理由も俄には肯首し難いが、寡聞にして真偽決定の文献学的研究を余り知らない。唯サン・ジャックの目録には真偽問題とは別の観点からも問題を提起するのではないかと思われる。それは、公式目録との関係である。マンドネの言う如くサン・ジャックの目録の方が古いものであるとすれば、公式目録製作者にはその存在が知られていたはずである。従って両目録に用いられた表題 *De ente et essentia* は共通の文献に依拠するものと考えられる。

例えば、マンドネが第一グループに属するものとしてトマスの聖列過程に作製されたと見做しているニコラス・トレヴェット Nicholas Trevet に関して、ワイシャイプ J. A. Weisheipl, O. P. は次の如く述べている。

Before Thomas began lecturing as master, he composed

two very significant treatises for his brethren. Tolomeo of Lucca notes that he wrote these before he became master (*infra magisterium*), i. e., before he was thirty-one years old. Tolomeo entitles these works *De quidditate et esse* and *De principiiis naturae*. Nicholas Trevet, depending on the archives of Saint-Jacques, gives their titles more precisely. The first is *De ente et essentia ad fratres et socios suos*; the second is *De principiiis naturae ad fratrem Sylvestrum*. It is therefore clear that both of these early treatises were written in response to requests by his confrères.²⁾

トロメオはプトマエウスの略名であるが、奇妙なことには、ワイシャイプがマンドネの研究を知らながら、トロメオの第二の部分での表題のことに触れていない。更に重要なことは、トレヴェットが参照したというサン・ジャック古文書が右に述べた「説教者教団の著者名簿」中の目録なのかどうかということである。マンドネは、唯、トレヴェットの目録の中の五十に *Item, De ente et essentia, ad fratres et socios suos* とのみ記し、サン・ジャック古文書の参照を示唆する如き言及を何もしていないのである。従って、ワイシャイプのこの文には何か別の典拠があったと思われるが、それを確認するすべはない。

そこで、仮りに、トレヴェットが参照したというサン・ジャック古文書が「説教者教団の著者名簿」であるにせよないにせよ、彼

が「サン・ジャック古文書」と言われるものを参照するといふことが、もし可能であったとすれば、これとその他の事実を加味して、次の如き仮定も可能ではないかと思われる。

まず、ドミニコ修道会のパリでの拠点であったサン・ジャック修道院で記録されていた小論文の表題は *De ente et essentia* であり、それを基に、公式目録は、更に *ad fratres eocios* を付け加えてその表題としたのではないかということである。何故なら、公式目録の原型が帰せられているレイナルドウス・ド・ピェルノは、一二五九年以来トマス³の死に到るまでの忠実な随行員、即ち *socius* であり、サン・ジャック古文書を何らかの形で知っていたか、関係があつたと思われるからである。その上、ワイシャイプルが言う如く、*socius* が神学の教授に仕える者の意であるとするれば、神学教授就任以前の作である本小論文に、*ad fratres sciōs*、或は *ad fratres et socios suos* と *socius* が用いられることはないはずだからである。

ワイシャイプルは、レイナルドスに関して次の如く記している。

At one time in the Order of Preachers it was customary to supply a “socius” for the master in thology. The function of socius is best illustrated by Reginald of piperno, who was socius to Thomas from 1259 onward. He was a lector in theology, a priest, and a very competent secretary from the Roman Province of the Order. In other words, most authorities now agree that Reginald was assigned by

the Roman Province to assist Thomas in all his needs after Thomas returned to Italy from Paris. Reginald's functions as socius were to hear the master's confession, to serve him at Mass, to say Mass himself and allow Thomas to serve or at least attend if he were ill, to accompany him on journeys, to take dictation, and even to copy Thomas's *litera inintelligibilis* into legible script. He was more than a mere secretary who copied and took dictation; he was a personal companion, looking after all Thomas's needs. Reginald of piperno, an Italian slightly younger than Thomas, served in this capacity from 1259 until Thomas's death. He served the needs of Thomas in much the same way as Godfrey of Duisburg did for Albert the Great in Germany.

レイナルドウスがトマスに果たした役割が並々ならぬものであつたことが窺える。

勿論、*socius* と呼ばれるべき人々が彼の外にも多く居た。小論文表題中の *socius* も、この広い意味に解されるのが普通であつて、シヨナーは次の如く述べている。

Il l'a dédié ad Fratres socius, sans doute ses compagnions qui, venus à Saint-Jacques pour des études supérieures, suivaient son enseignement et l'avaient prié de leur fournir une analyse des notions philosophiques. fonda-

mentales dont la nouveauté les prenait au dépourvu. Peut-être saint Thomas saisit-il cette occasion de se préciser à lui-même son vocabulaire philosophique, car le traité comporte bon nombre de définitions et d'explications de termes.

更にグループマンはこの点に関して次の如く述べている。

In der Adresse: Ad fratres et socios, die uns mehrfach ist, können wir auch keine sichern Anhaltspunkte für eine engere Umgrenzung der Entstehungszeit gewinnen. Man wird darunter Ordensgenossen verstehen dürfen, mit denen Thomas in St. Jacques zu Paris zusammenlebte.

ad fratres socios' 或いは ad fratres et socios の指す人々が、いずれにせよ、シユヌーやグループマンの言う通りであろうし、大きく外れるはずもない。問題は、執筆目的を示すこの言葉をトマス自身が書いたのかどうかということである。小論文の表題そのものさえ、トマス自身が記したのかどうかという疑問も生じて来る。仮りに、トマス自身が表題を決め書き入れてあったとするならば、何故、目録上三つの表題、即ち De ente et essentia, ad fratres socios と De quidditate et esse と De quidditate entium の三つがあり得るのであろうか。従って、表題はトマス自身が決定したのではなく、読んで写した人々が内容に従ってつけたという可能性もあり得ると思われる。この事は、現在知られている諸写本のもつ多様な表題によっても支持されるよう

に思われる。

本論文は、その重要性故に、写本もかなりの数が伝えられているものである。

オランダ・ロラン・トスラン M.-D. Roland-Gosselin, O. P. のテキストは、パリ写本によって校訂したとして、次の諸パリ写本を挙げている。

Paris Ste-Geneviève	238 fol. 193-196. -XIV ^s . G
〃 Nat. lat.	2740 fol. 36 ^v -40 ^v . -XIV ^s . A
〃 〃 〃	6433 Bfol. 107 ^v -111 ^v . -XV ^s . B
〃 〃 〃	6512 fol. 132-135. -XIV ^s . C
〃 〃 〃	6552 fol. 36-39 ^v . -XIV ^s . D
〃 〃 〃	14546 fol. 79-84. -XIV ^s . E
〃 〃 〃	16153 fol. 21-25 ^v . -fin du XIII ^s . F
〃 Université	209 fol. 211-127. -XV ^s . U

これらの内、聖ジュヌヴァイエ写本 (G) を底本としたと述べている。

これらの写本の持つ表題には四種類あり、GとAは De essentia と BとUの一覽表中で De ente et essentia' CとDは De esse et essentia' D・E・Fは De entium quidditate と述べているようである。

目録に現われた三種類の表題、即ち De ente et essentia, De quidditate entium, De quidditate et esse と、更に De essentia と De esse et essentia の二種類が増えているのである。

又、グラープマンは各地に散在する写本を報告しているが、それに依れば、聖ジューヌヴァイエ図書館の写本では *tractatus de essentia* とローラン・ユスランの証言と一致している。ボルドー図書館の *Opuscula-Codex 131 fol. 13^v* では *Incipit tractatus de ente et essentia compositus a fratre Thoma de Aquino (sic)*、アヴァニオン市立図書館 *Cod. 253 fol. 13^v* とウインのドミニコ修道院図書館 *Cod. 121 fol. 50^r-54^r* とヘルランゲンの大学図書館 *Cod. 485 fol. 162^v-166^v* との三つでは *De entium quidditate*, オックスフォードの *Corpus Christi College Cod. 225* では *tractatus fratris Thome de ente et essentia* となっている。

先の五種類の他に、*De entium quidditate* と *De quidditate entium* を区別しないとして、更に *De ente* が加わり、計六種類の表題があることになる。

このように、トマスのオプスクラムがいくつかの表題を持つ例は、本小論文だけではなく、例えば、*De regimine principum* が、*compendium theologiae* と表示されたりすることが報告されている。マンドネの列挙する目録で見ると、本小論文程、多様な表題をもつものは外に見当たらない。

これらの写本の成立年代に関しては、トマスに *frater* を用いていることで、少なくともその元になるものは一三二三年の彼の列聖式以前のものであろうといった程度の推定しかできず、それら相互の関係も皆目分らない。

又、これらの間接資料では、表題に *ad fratres et socios* 等が付記されていたかどうかも断言することはできない。唯、例えば、グラープマンの報告するヘルランゲンの大学図書館の写本の表題については、その最後に *Explicit tractatus fratris Thome de Aquino ordinis predicatorum de entium quidditate* であるそうだが、この証言から推測するならば、*ad fratres et socios* 等は、写本一般には付記されていなかったのではないかとも思われるが、断言はできない。

しかしながら、トマス自身がこの小論文の表題を決定したとすれば、何故かくも多くの異なる表題があるのであろうか。仮りにこの小論文には元々表題が付けられていなかったのではないかという仮定が可能であるとすれば、執筆目的を示す *ad fratres et socios* も後に付加されたものであるという可能性は更に大きいと思われるのである。

目録・写本等を直接参照できず、限られた間接資料に基づく推論であるので、あくまでも暫定的仮定であることを前提として、少なくとも、本小論文の執筆目的を示すと思われる *ad fratres et socios* の句が元々なく、トマスの聖列に際して作製した公式目録の折に付記されると考えてみたい。

とすれば、本小論文の執筆動機をもう一度考察しなおす必要があるのではないかと思われるのである。

三

本小論文の真偽問題と同様、その執筆目的に関しても何ら疑問の余地のないものと見做されている。前節に引用したシュヌーヤグラープマンの言葉が、本小論文の執筆目的に関する一般的見解である。

更にこの見解の例をもう一つ引くならば、ローラン・ゴスランは、その著名なテキストの序文の冒頭に次の如く記している。

L'authenticité de l'opuscule de saint Thomas d'Aquin connu sous le titre: De ente et essentia, n'a jamais été contestée. Les principaux catalogues des ouvrages de saint Thomas nous apprennent, en le signalant, qu'il fut composé par le saint Docteur à l'intention de ses frères et compagnons; par où il faut entendre, sans doute possible, ses frères en religion, et, probablement, ceux d'entre eux qui, venus comme lui à Paris au couvent d'études générales de Saint-Jacques pour y parfaire leurs études, suivent son enseignement philosophique de bachelier.⁶⁾

これでも分るように、グラープマン、シュヌー、ゴスラン等は殆んど例外なく、本小論文の執筆動機を *ad fratres et socios* の線上で解しているのである。ここでこの動機説に異を唱えるには、余りに資料が足りない。ただ、前節に考察した如く、仮りにトマス自身が表題を決定したのではないという可能性がいささか

なりともあるものならば、そこから生じる二、三の問題点を指摘したいと思うのである。

勿論、写本の場合には、動機を示すこれらの語句を省略することもあり得るだろう。その場合でも、多数の表題が存在することには以前として問題点が残るのではないかと思われる。それに、他の研究者と同様、ゴスランも「しかしながら、この『有について』は急速にこの段階を越える。」*Cependant le De ente de-
passe rapidement ce stade* と言って認めている如く、哲学的術語の単なる定義・説明の段階に止まらず、その体系的理論展開は、他のオプスクルムに見られない特質を示しているように思われるのである。元来オプスクルムはある特定の問題点を選んで論ずるもので、本小論文の如く、体系的構成をとるものではない。この小論文は、複合実体から *esse ipsum* たる神に到るその存在論的秩序付けを示しており、ここに神の存在証明を読みとる研究者もいる程である。従って、執筆動機、或いは執筆意図を、トマスが置かれていた歴史的状况とその課題の中で、より内的な観点からも考察する必要があると思われる。

そこでまず、*ad fratres et socios* に関する問題点を指摘しておきたいと思うが、その場合、前節にあげたプトレマエウスの『教会史』におけるトマスの著作目録が文献上一つの問題点を提示する。

先にも述べた如く、この目録は二つの部分に分られており、第一の部分である第二十二巻第二十一章では、本論文が *De quid-*

ditate et esse とのみ記されていて、動機を示す語句は何もない。そして、次の第二十三卷第十一章に引き続いて、『神学大全』の最終部分に関する言及等があつて、この章の終りの部分でオプスクラムに関して次のような証言がなされている。

Et quamvis multa sint quae scripsit, quae opera sunt diffusa, ut materia requirit; scripsit tamen quaedam Opuscula, secundum consultationes sibi factas a diversis principibus et personis, quae in uno volumine reponuntur, sicut Epistolae Augustini, et eo ordine quo traduntur, hic scribuntur.

これに依れば、トマスのオプスクラは一卷本の形で伝えられていたものがあつたようであるが、このことは、ベルナルドゥスも *in unius voluminis corpore* と記して裏付けている。

マンドネは、この一卷本がトマスの列聖式以前に「謂わば公式的」*pour ainsi dire officielle* なものとして流布していて、「公式目録作成者は、この一卷を基に二十五のオプスクラを選び、何らかの規準に従つて配列したと考えている。そして、この一卷が編集されたのはトマスの死んだ頃のものであらうと言っているが、誰の手に成るものかは不明である。だが、トマスの終生の *socius* で、彼の諸著全てを持っていたと言われているレイナルドゥスが、公式目録との関係から考えても、何らの形で関与していたことは充分にあり得ることである。

プトレマエウスは恐らく、この一卷をもとにして、右の第二十

三巻の次の第十二章から三章にわたつてトマスのオプスクラを列挙しているが、その第十二章で挙げている本小論文の表題は、*Tractatus De ente et essentia, quem scripsit ad fratres et socios* となつていたのである。

この様に見て来ると、オプスクラを集めた一卷、公式目録、サン・ジャックの説教者教団の著者名簿の目録、そしてプトレマエウスの第二の部分での本論文の表題が同一の系列上のものではないかという推測が生じる。それも、レイナルドゥスに発するものである可能性が多分に大きいのではないかと思われるのである。それにしても、プトレマエウスが第一の部分で挙げている *De quidditate et esse* という表題は何に由来するのか以前として疑問が残る。

そもそも、*ad* の意味にも問題があるのではないかと思われる。公式目録は、トマスの列聖式に際するものである故に、公式的なものとしての配慮が施こされている印象を受ける。例えば、プトレマエウスの第二の部分の第二十三卷第十二章で挙げられている *Tractatus Contra errorem Averrois circa intellectum humanum* は「公式目録ではその二十番目に、*De unitate intellectus, contra Averroistas Parisenses* と、表題として整えられているだけではなく、『アヴェロエスの誤謬に対して』が『パリのアヴェロエストたちに対して』と変えている点は、当時の歴史的状况に鑑み公式目録の傾向を一面において示唆しているように思われる。更に又、*Tractatus Contra errores Graecorum, ad*

petitionem Urbani Papae が公式目録では、その十二番目で petitionem を取り去って単に Contra errores Graecorum, ad Urbanum Papam となっている。又、西目録の 'petitio 等の語がなく、例えば、De principis naturae, ad fratrem Silvestrum. の如く、一致しているものもある。

これらの諸事実から考えて、ad は、それらの人々のために書かれた意と同時に、書かれたものが、その人々に与えられた、或いはその人々のもとに保存されたことを意味する場合もあるのではないかと思われるのである。仮りにこの様な意味に解せるとしても、各々の ad が元々どの意味であるかを確定することはできない。従って、動機を示すと考えられている本小論文の ad fratres et socios という言葉が、仮りにレイナルドゥスの証言に基づくもので信頼の高いものであるとしても、なお諸種の問題を孕んでいると言わざるを得ないであろう。いずれにせよ、本小論文の動機に関する諸研究家の見解は、この ad fratres et socios に囚われ過ぎて印象を拭えないのである。グラープマン、ゴスラン、シュヌー等の諸権威も認めざるを得ないように、本小論文は「ドミニコ会の兄弟たちと随行者たちのため」の哲学的術語の定義・説明をはるかに越えた存在論的秩序に関する体系的展開を示しているのである。

そこで、本小論文の動機を ad fratres et socios の線から捉える観点を一時保留し、トマスの置かれていた歴史的状况が彼に課した課題との関連において再考してみたい。

四

本小論文の成立年代については、トマスの第一回目のパリ滞在中で神学教授になる以前、即ち、一二五二年から一二五六年の間が考えられており、この期間に草されたことには現在ほぼ異論はないようである。

この期間の設定は、先のプロレマエウスの infra magisterium と nondum existens magister に基づくものであるが、更に正確な年代を確定する資料は現在のところ何もない。研究家は各自の根拠に基づいて更に正確な年代を推定している。ケティフェシャル Quétif-Echard とヴェルナー K. Werner は、トマスが未だアルベルトゥス・マグヌスの下に居た一二四八年から一二五二年と早目であるが、グラープマンは、パリ滞在中の一二五六年以前とのみ考えている。マンドネとヴァルツ Walz は、『自然の諸原理について』 De principis naturae と同じ頃で一二五五年を、バウル Baur はパリ滞在中の最初の時期、一二五二年の少し後を、それぞれ考えている。

ローラン・ゴスランは、本小論文で論じられている個別化の原理の問題に際して用いられた signatum という語に注目し、命題集注解における用語例と比較対照して、一二五四年と一二五六年の間に置き、命題集の第一巻第二十五章を注釈していた頃のものに見做している。

この様に正確な年代を定めるに足る決定的資料を欠いている

が、以下に述べる理由により、ここではゴスランの一二五四年から一二五六年説を取りたい気がする。いずれにせよ、プトレマエウスの証言が一つの決め手になっている。先に引用した如く、この時期に書かれたものとして、この小論文の外に次の三つを挙げている。即ち、『命題集注解』、『聖愛に関してギレルムス反駁』*Contra Guillelmum de Sancto Amore* (現在では *Tractatus De contra impugnantes Dei cultum et religionem* という表題になっており、神学教授就任前後のものと考えられている)、『自然の諸原理について』*De principis naturae* これら三つである。

この最後のオプスクラムは、アリストテレスの『自然学』第一巻と第二巻に依拠するものと考えられており、『有と本質について』が持っているような体系的理論展開に欠け、未完に終わっている。アリストテレスに基づいた自然学的諸原因の概念に関する素描の如き印象を受けるものである。

現在 *Scriptum super libros Sententiarum* の表題で知られている『命題集注解』は、言うまでもなく、トマスがパリ大学において命題集学士 *baccalaureus Sententiarum* として行った講義から生まれたもので、神学大全との関係において彼の初期の神学的思索を知る上で重要なものである。とは言え、講義録といったものではなく、トマスが神学博士になってからも書かれ、手を入れていたと言われている。但し、トマスが *baccalaureus Sententiarum* であった時期についても議論がある。

ペトルス・ロンバルドゥスの命題集を講ずる役割が学士に課せられるようになったのは、一二三一年以後であるが、パリ大学では、一二三五年から四十年の間に確立したと考えられている。その講義の前に正規の課程として、一、二年聖書学士 *baccalaureus biblicus* として簡単に聖書を講じ聖書博士になるのが一般的であった。従って、グラープマンやマンドネは、トマスが一二五二年にパリに来た時は、通例に従い聖書学士としてであり、命題集を講じたのは、一二五四年から一二五六年と見做している。これに対し、ワイシャイプルは、諸種の理由から一二五二年にパリに来た時から、神学博士就任まで命題集学士であったと結論している。

しかし、ここで問題としたいのは、聖書学士であったか命題集学士であったかではなく、この『命題集注解』と神学博士就任との関係である。ワイシャイプルは、この書が現在の哲学学位論文に概ね該当するものと見做し、*Roughly the Scriptum on the Sentence can be compared with the modern Ph. D. thesis.* と言っている。

確かに、トマスの『命題集注解』は、ロンバルドゥスの枠を越えて、トマス独自の所謂 *exius* と *redius* という構成を取っており、『神学大全』に通ずるその構成は、彼の思索の成熟を跡づける上でも重要であり、学位論文に匹敵する内容を有するものであることには何ら異論はない。しかしながら、仮りに、現実的に形を成した学位論文とも言うべきものを想定するとすれば、命題集

の講義が神学博士への前段階であり、神学博士就任後もこの書を執筆していたという証言も考え合わせるならば、これよりも本小論文『有と本質について』の方がそれであった可能性が高いのではないかと推測するのである。

トマスがパリに着いた一二五二年から神学博士就任に到る間は、反修道会論争で騒然としていた時であった。当時、パリ大学には *magister* の席が十二あったが、その内、二つをドミニコ会が、一つをフランシスコ会が占めていた。法王の軍隊と呼ばれ、会則に従わねばならないこれら修道士の存在は大学内でも異質なものであった。一二五二年に、特にドミニコ会の二つの席を一つにせよという要求に端を発した世俗教授団 *consortium magistrorum* の反托鉢修道士運動は、先のギレルムスを中心として一二五七年まで続き、大学側の敗北で終わった。先に挙げたトマスの小論文 *Contra impugnantes Dei cultum et religionem* や、ギレルムスの反修道士論文 *De periculis novissimorum temporum* に対する反論である。この論文は一二五六年十月に法王アレクサンデル四世によって否認され、翌年彼は追放されたが、かかる激しい反修道士論争の最中にトマスは神学教授の席に就任したのである。例えば、一二五六年六月十七日にパリ司教レギナルドウスに宛てて出した法王アレクサンデル四世の手紙は、その状況を次の如く伝えている。

Predicti magistri et scolares hujusmodi concordiam stimulis discordie circumseptam observare, sicut accepimus,

*non curarunt, illis qui volunt fratrum ipsorum lectiones et disputationes ac predicationes audire, necnon et illis qui dilecti filii fratris Thome de Aquino voluerunt interesse principio, se nequiter opponendo.*⁶⁾

この年の二月末に司教区文書局長は、サン・ジャックの僧院長に手紙を送って、彼からトマスが神学の教授職を受諾し、その準備をするように告げること命じている。

まだ三十才を二つか三つ出たばかりのトマスに何故この時期に教授職 *licentia in theologiae facultate docendi* を与えようとしたのか、その理由は明らかではない。この点についてはワイシヤンプルも次の如く首をかじっている。

We do not know what prompted the chancellor to choose this particular time to confer the license; the early biographers say however, that Thomas had "zealously and fruitfully completed his course of study." Although March or April would have been the proper time to petition for the license, Thomas could hardly have completed his lectures on the fourth book of the Sentences. He did not have a complete text to present to the stationer's until sometime in 1257. William of Tocco expressly says that Thomas wrote on the Sentences during his years as bachelor and "in the beginning of his mastership."⁸⁾

この証言に従うならば、免許授与はこの時期を選んだ理由は分ら

ないとしても、授与の根拠は、トマスの卓越した講義内容そのものであって、書かれた著作『命題集注解』ではないことになる。勿論、このようなことは充分あり得るであろう。しかし、もし既に完成された学位論文の如きものを求めるとすれば、ワイシャイプル自身の証言からも、先の『命題集注解』ではあり得ないことになる。そこで、残るものは、これまでに述べたところからも、この小論文『有と本質について』以外にはないのである。確かに、この小論文が学位論文に類するものだという証拠もなければ、そうではないという証拠もない。

しかし、この小論文によってトマス独自の *esse* に依る存在論が根本的構造の内に示されており、同時にキリスト教教理がどの程度までアリストテレスの論理と概念で表出し得るか、又、どの点でアリストテレスが越えられねばならないかが示されている限り、これこそ、カトリック教会の焦眉の課題であった所謂「キリスト教の真理とアリストテレスの融合」の具体例と言ってよいものであつたらう。従って、ラテン・アヴェロエストたちで猖獗極めていたパリ大学における護教博士として正に適切な体系を示すものであつたと思われるのである。

さてそこで、トマス独自の *esse* による存在論が問われなければならないが、この問題は他日を期さねばならない。

¹⁾ Martin Grabman, *Mittelalterliches Geistesleben Abhandlungen zur Geschichte der Scholastik und Mystik*, s. 328, München, 1926.

²⁾ J. A. Weisheipl, O. P., *Friar Thomas d'Aquino, his life, thought and works*, p. 78, N. Y., 1974.
³⁾ *Ibid.*, p. 111.
⁴⁾ Chenu, M. D., O. P., *Introduction à l'étude de saint Thomas d'Aquin*, p. 280~281, Paris Vrin, 1950.
⁵⁾ *op. cit.*, s. 316.
⁶⁾ M.-D. Roland-Gosselin, O. P., *Le "DE ENTE ET ESSENTIA" de S. Thomas d'Aquin*, Paris, 1948.
⁷⁾ P. H. Denifle et Ae. Chatelain, *Chartularium Universitatis Parisiensis*, Paris, 1889~94.
⁸⁾ *op. cit.*, p. 97.